經濟論叢

第136巻　第1号

経営戦略論に関する若干の考察 (4)……降　旗　武　彦　1

いわゆる「植民地物産」について (4)……渡　辺　　尚　35

「ラディカルな欲望」について……神　谷　　明　61

技術革新と制限的慣行……川　口　　章　80

1800年前後における英領インドの拡大と
　イギリス東インド会社……今　田　秀　作　99

昭和60年7月

京都大學經濟學會

「ラディカルな欲望」について

神　谷　　明

はじめに

我々は前稿で，初期マルクスの欲望論を概観して次の論点に達した。「資本主義は一方で欲望の全面開花の条件をつくりだし，欲望の潜在的エネルギーを累積させていくのに，他方でたえずその欲望の実現を断念させ，両者の矛盾を拡大させていく」[1] ところに欲望論の基本的論点をおいたのである。そしてその資本主義における「二律背反的」欲望の構造の変革の契機を「ラディカルな欲望」にみいだしたのであるが，それはまだ議論の出発点であった。資本主義から「来たるべき社会」への移行のエネルギー，変革主体形成のモメントとしての「ラディカルな欲望」の意義を明らかにし，マルクスの欲望論に正しく位置付けることが本稿の課題である。

この「ラディカルな欲望」は現代の社会ではどのような様相で我々の意識（潜在的かもしれないが）にのぼっているだろうか。

ここに現代の貧困現象を語るものの一つとして「あらかじめ失なわれた欲求」という考え方がある。「このあらかじめ失なうということの裏側には，資本主義社会が高度の生産力を実現し，科学・技術の進歩を実現してくれたおかげで潜在的な高い能力をもちながら，今日，それを現実に生かすことができない」[2] という事態を表現したのが「失なわれた欲求」である。その背景には，労働と生活の両面にわたって人間が本来保有する精神的先取り能力が疎外され，将来見通しや欲求がかき消されているという状況があると認識する[3]。そこで

1） 拙稿，マルクスの欲望論，「経済論叢」，第124巻第1・2号参照。
2） 池上惇，「地域づくりの教育論」，1983年，133頁。
3） 二宮厚美，願いわけ集団づくりと変革主体，「科学と思想」No. 53，1984年7月，39頁。

はたんなる欲望の不充足が問題となっているのではなく，欲望の充足の仕方＝システム（我々はこれを「欲望の体系」と呼ぶ）そのものに対する不信，動揺が問題とされているようだ。だから現実の「欲望の体系」に対する疎外の意識は，当初は「現代の精神的その日暮し」として現象するのだが，その内実はそれほど一面的ではなく逆の側面も指摘されねばならない。というのは「精神的その日暮し」は過去の欲望水準そのものが絶対的に低く抑えられそして充足も十分ではなかった時の「その日暮し」とは異なり，急激な社会変化に対する対応と評価しうるし，そこに来るべき将来にそなえて種々の能力を準備する必要を高め，多面的に潜在能力を植えつけることに意味をみい出すことも可能とするわけである[4]。

以上の様な池上惇氏や二宮厚美氏の状況把握に対し，同じ現実を個人と社会との関係で見た時に次の様な考察も可能であろう。1970年代日本の同時代史を書こうと試みられた山崎正和氏は言っている。「労働意欲の低下，家族の崩壊，青年の社会的無関心……といった現象がつぎつぎに指摘されて，それらはすべて『ミーイズム』と呼ばれる，伝統的個人主義の頽廃現象として評価されている。たしかに西洋の場合，社会的な紐帯の弛緩は誇りある個人の自立を強めることなく，むしろ逆に，責任感や自恃の精神を弱めて，数百年の歴史を持つあの健全な個人主義を破壊しつつあるように見える。そうした報道と評価に接した日本人は，当然そこに自分自身の未来像を読みとり，いやがうへにも，身近に予感される変化に否定的な感情を抱きがちなのである。」[5]

この二つの現代に対する状況把握はそれぞれの問題意識が同じであるとは言えないかもしれないが，現代の社会の「欲望の体系」に対する個人や集団の確信の動揺の様子を表現しているものと考えることができる。二つの所説で我々が注目できるのは「欲望の充足システム」が社会と個人に対してもっている意義の変化が個人と集団の社会に対する意識にどの様な変化をもたらすかという

4) 同上，39頁。
5) 山崎正和，「柔かい個人主義の誕生」，1984年，43頁。

点である。社会が変化する時には「欲望と労働の体系」の変化がその基礎で進行し，個人と集団が社会の変革を欲求するには，「欲望の充足システム」に対する不満だけでは十分ではなく，来たるべき社会の新しい「欲望の体系」を先取りしている事が必要である。しかも社会は社会自からの「欲望の体系」を根本的に変革するには，個人と集団の新しい「欲望の体系」の先取りだけではこれも不十分であり，古い「欲望の体系」の「堕落・頽廃・行詰り」とその打開の道筋が明らかにされなければならない。

そこで我々には解明されるべき二つの論点がある。一つは個人と集団の新しい「欲望の体系」への移行には何が主なモメントとなるのか，そしてその主体とは何かという事，今一つは，社会総体の変革に対して「欲望の体系」の変革がいかなる意義をもっているのかという事である。

我々はこの課題を「ラディカルな欲望」という概念の検討を通じて果すことができるのではないかと考える。そこで考察の順序をまず，現代の資本主義社会の「欲望の体系」を生みだした過程を「資本の歴史的使命」として描き，その矛盾した傾向を握み出す。次いでその矛盾の「解決」の意欲としての「ラディカルな欲望」概念をアグネス・ヘラーの見解を通じて検討する。そして彼女の見解の問題点を「移行論理としてのラディカルな欲望」論の見地から明確にし，最後にその克服の方向性を現代資本主義社会における欲望問題の解明に見い出す。しかしながらこれらの議論の対象と素材はあくまでもマルクスの欲望論であってそれ以外の何ものでもない，いわば「マルクス欲望論」の一解釈にすぎないのである。そしてマルクス欲望論の範囲は前稿を受けて，「経済学批判要綱」（以下「要綱」），「資本論」に重点を移している。

I　「資本の歴史的使命」と欲望

1　近代市民社会の欲望論

社会を構成する諸個人の欲望をその社会との関係で論じた人はマルクスが最初ではなく，市民社会における基本的概念として，マルクスの前に多くの政治

学者・経済学者・哲学者によって論じられている。

17世紀にホッブスが提起した近代社会哲学の根本問題——欲望を有する諸個人はいかに社会を構成するかという問題を，アダム・スミスは「欲望と労働の体系」として市民社会を把えることによって答えたのである。スミスは「単なる欲望の主体としての人間を，同時に労働する生産の主体としてとらえることによって，ブルジョア社会の核心をとりだすことに成功した。」[6] そして個々に不平等や欲望の不充足が存在するにしても，総体としての社会は「欲望と労働の体系」を発展させ豊かになっていくものと考えたのである。スミスが諸個人の欲望の生産とその充足の体系を分業にもとづく生産と消費の体制の枠内で考え，諸個人は社会全体の「調和」の下に「同感」しうるとした。そう考えることによってルソーの市民社会不平等論をひっくりかえすことができたのである。これに対しヘーゲルは，欲望と労働とを人間本質との関連で把え，市場システムではなく国家が，諸個人の欲望の悪無限的展開を制御しうる唯一の存在と考えたのである[7]。スミスは欲望を持った諸個人と社会との関係を市場システムの調整の下に把えヘーゲルは，国家による制御に両者の関係を止揚するものとしたのである。どちらにしても諸個人が自己の欲望を充足し，同時に社会はその調和能力をもっており，市民社会及び国家として存在しているわけである。そこには「欲望と労働の体系」の有する矛盾の論理は社会と個人の相互関係を変革させていくモティーフとしては意識されていないのである。

マルクスは以上の様な近代市民社会の欲望論を前提にして出発した。それ故，マルクスも諸個人の欲望発達の積極的評価からスタートするのである。つまり「欲望の体系」の発展の担い手としての資本の「文明化作用」が積極的に評価される。しかしマルクスはそれだけにはとどまらない。その「資本の文明化作用」がもたらす「欲望の体系」そのものの変革の契機も又そこに発見するのである。この契機を我々は「ラディカルな欲望」として考えているのだが，こ

6) 平井俊彦，欲望の体系，「思想の歴史9巻」（河野健二編）1965年，13頁。
7) 杉原四郎，「経済原論Ⅰ」，1973年，103頁。

の概念の発見と展開こそ，先行する欲望論からマルクスを区別する特徴だと思うのである。「ラディカルな欲望」を生みだしてこそ「資本の文明作用」は「資本の歴史的使命」を果すことができるのである。そこで我々はまず，欲望発展の担い手である「資本の文明化作用」について，マルクスの「経済学批判要綱」を素材にして見ていくことにしよう。

2　「要綱」の欲望論

マルクスは「要綱の序説」で，生産と消費の関係を欲望を媒介として次の様に語っている。「消費は新しく生産の欲望を創造し，こうして生産の前提である。……消費が生産の対象を，内的な像として，欲望として，……観念的に措定すること」そして「消費は欲望を再生産する。」[8)]

消費が生産の目的を措定し，消費は新しい欲望を再生産するという一般的関係は，自然的欲望を超えた社会的欲望の創出，消費の拡大を内的契機として生産の拡大をはかる一歴史的特徴をもつとマルクスは言う。つまりあれこれの欲望の創出，拡大が，欲望の特徴的形態には無関係で，労働の目的が個人の特殊な欲望の対象である特定の生産物ではなく，富の一般的形態である貨幣となることで，労働はその特殊性に無関心となり，その様に社会的性格をもって欲望の対象が拡大していくという様式が進行していくということである。

資本主義では，この生産様式は剰余価値生産を目的とすることで特徴づけられているのだから，そこでの欲望の創出と充足及び発展のあり方は，当然剰余価値生産に規定され，賃労働者である個人の欲望の発展は資本と賃労働との関係と切り離し難く結びついている。マルクスはここで，資本主義における諸個人の欲望の量的還元化，貨幣一般への還元化，剰余価値による諸個人の欲望の規制について述べている。

しかし他方でマルクスは，欲望の量的還元化，欲望の疎外をもたらす剰余価値生産の発展が同時に，分業・機械体系の飛躍的発展の結果，その積極的側面

8) Karl Marx, *Grundrisse der Politischen Ökonomie* (Rohentwurf) 1857-1858, ANHANG 1850-1859, *Dietz Verlag Berlin*, 1953, S 599. 高木幸二郎監訳「経済学批判要綱（草案）1857-1858年」1958-1965年，661頁。

もあることを書くことを忘れない。つまり新たな「労働の体系」が出現し，必要労働時間の短縮による「自由な時間」の創出を可能にし，社会の欲望一般の拡大をもたらすということがそれである。この点（労働時間の短縮――「自由な時間」の創造――欲望の拡大とその享受能力の発達――人間の労働能力の発展――生産力の発展――労働時間の短縮……という循環の体系）の指摘こそ「要綱」欲望論の重要な特徴である。

「労働時間の節約は自由時間の，つまり個人の完全な発展のための時間の増大にひとしく，またこの時間はそれ自身ふたたび最大の生産力として，労働の生産力に反作用をおよぼす。それは直接的生産過程の立場からは固定資本の生産とみなすことができる，というのはこの固定資本は人間自身だからである。」[9]

社会的生産力の発展を背景とする「労働の体系」とそれに照応する「欲望の体系」は，資本主義においては剰余価値生産における，「必要労働と剰余労働」，「労働時間と自由時間」という対抗関係の枠内で展開されることで新しい規定を受け取ることになったのである。「自由な時間」が社会全体のために創出される段階では，「欲望の体系」はもはや，狭隘な自然的欲望を乗超えるだけではなく，欲望の充足水準の問題だけでなく，社会における諸個人の欲望享受能力の発達とそれに対する意欲を内容として含むようになるのである。この事が現実に自由時間が諸個人に実現，保障されているかは余り問題ではなく，それが可能性でも存在することが重要である。

マルクスは，社会的欲望が自然的欲望を超えて拡大していくことを，必要労働を超えて剰余労働を創出しようとする資本の「歴史的使命」として描きだしている。「資本の偉大な歴史的側面は，この剰余労働を……たんなる生存という見地からすれば余計な労働を創造することである。」[10] そして一般的富の所有と維持がわずかな労働時間しか必要としなくなるまで発展した生産力は個性

9) *ibid.*, S 13, 同上訳書13頁。
10) *ibid.*, S 231, 同上訳書146頁。

の発展のための物質的条件となる。この個性は生産でも消費でも多面的に活躍し，その労働は十全に展開することができるのである。その時には欲望はもはや歴史的に形成されるものとなり，その自然的必然性は直接的形態としてはなくなっている。

この点にこそ資本による生産の「革命性」が現われているのであって，新しく形成された資本主義に「固有の欲望の体系」の一般的拡大が，それまでの伝統的諸制約を克服していく過程こそ「資本の歴史的使命」として確認されなければならない。「それゆえ資本は生産的である。言いかえれば，社会的生産力の発展にとって本質的な関係である。」ところが，否，それ故にといった方が正しいのかもしれないが，「資本は，この生産力の発展それ自体が資本自体に制限を見いだしたときに，はじめてそうしたものであることをやめる」[11] のである。

3　「資本の歴史的使命」と「欲望の体系」

我々は次に「資本の歴史的使命」が諸個人の「欲望の体系」にどんな新しい内容を規定したのかを見てみよう。その内容は社会の欲望と個人の欲望の対立の資本主義的形態から生じるもので，対立の止揚の条件を胎みつつ，諸個人の個性の全面的発達の条件となるものを意味している。

「個々の個人のばあいと同じく，社会の発展，社会の享楽，社会の活動の全面性は，時間の節約にかかっている。時間の経済，すべての経済は結局そこに帰着する。」[12]

一般的に考察すれば，資本主義においても時間の経済は社会のために「自由に処分しうる時間」を創造し，個性の豊かな発展の一条件となる。つまり「必要労働のある最低限への縮減，その時合この縮減には，すべての個人のために遊離された時間と創造された手段とによる諸個人の芸術的・科学的教養が照応する。」[13] しかし，こうした可能性は資本主義では一つの矛盾として展開する。

11）*ibid.*, S 231, 同上146頁。
12）*ibid.*, S 89, 同上93頁。
13）*ibid.*, S 593, 同上654頁。

資本は労働時間を富の唯一の尺度と措定しているので必要労働時間の減少は剰余労働時間を増加させるためになされる。ところが，「自由に処分しうる時間」を創造することが資本の規定であるかぎりは，意にかかわらず社会全体にとっての労働時間の減少の成果を万人の発達のために解放する。だがこのことは資本主義下の諸個人全体に進行するのではなく，むしろ労働者にとっては次のように進展することを言わなければならない。富の尺度としての労働時間は，富それ自体を貧困のうちに立脚するものとして，また自由に処分できる時間を剰余労働との対抗のなかで措定するのであり，労働者が長時間の労働を強制される傾向は強まりこそすれ弱まることはないのである。

「資本の文明化作用」を軸として展開されるマルクスの「要綱」の欲望論の特徴は，「豊かな欲望」をもった人間の生産の条件がほかならぬ人間を支配する資本そのものによってつくられるという視点が第一のものである。この点は初期のマルクスにおいては不十分であった視点と言えるだろう。この資本主義における二律背反的特徴を次に我々は「ラディカルな欲望」概念を中心にして考察する予定だが，今少しこの矛盾の過程について見てみよう。

豊かな欲望を有する人間とは，労働能力の面においては普遍的な生産力＝自然改造能力の一翼を担う力量を持っているだけでなく，消費においてさまざまな財とサービスを享受する力を有し，それによって豊かな感性と文化に対する理解力と創造力をも豊富に有している。ところが資本主義はそうした人間そのものを直接にうみだすわけではない。そのような発達に対する欲望を生みだすのであり，今はそれが疎外されているという意識をもたせるのである。その意味で「労働の体系」と「欲望の体系」の相互関係は矛盾した過程をたどりつつも，諸個人の欲望を物質的欲望から出発させながら，人間の発達という高次でより本質的な欲望にまで高めざるを得ないのである。だから当然欲望をめぐる矛盾は直接に欲望対象としての商品の生産と消費の矛盾＝経済恐慌として現象するだけではない。

人間の発達欲望をどのような対象をどの程度用い，有限な時間を費して実現

させるのかということを生産物の分配と時間の配分の問題とする場合に，その両極に資本と賃労働という二者が登場して，その両者の対抗関係として資本主義社会の矛盾は現われる。だから変革への意識は，恐慌への対応策としてのより大きな消費水準，高賃金へと向かうだけでなく，かかる両者の対抗そのものを認識し，資本主義的「欲望の体系」から新しい社会の「欲望の体系」へと「欲望の体系」そのものを転回させていくという意識，すなわち「ラディカルな欲望」を認識すること，その内実として新しい「欲望の体系」を創造していく手がかりとなるもの（例えば個人の発達欲望やそれを保障するものとしての福祉の要求）を「古い欲望の体系」の中に見い出していくことでたんなる観念やユートピア的性格を脱脚しうるだろう。我々は結論の一部を先取りしてしまうのだが，マルクスの欲望論はそうしたものとして構想されていると解するのである。

II　「ラディカルな欲望」

マルクスの欲望論の特徴を「ラディカルな欲望」概念を中心にして考察したのはアグネス・ヘラーであるが，ここではまず彼女の主張の論旨を要約し，次にその問題点を検討することでマルクス欲望論の核心に迫っていこう。

資本主義において，欲望の疎外状況は最高段階に達し，その段階では，疎外そのものの乗超えの欲望もまた生みだされる。その乗超えの意欲として「ラディカルな欲望」を把えるヘラーは，資本主義社会のなかで転倒した欲望が再びノーマルな欲望に転化される「欲望の体系」の転回，「来たるべき社会」への移行の問題を解明しようとする。

誰が何故，資本主義を倒すのかという問題を実現されるべき理想としてではなく，因果必然性の過程として描き出すことがまずもってマルクス欲望論の核心であるとするヘラーはそれを次の様にまとめている。

資本主義は二律背反的社会であり，その本質は疎外である。類の富と個人の貧困は互いに措定しあっており，それは商品生産の普遍化によって生み出され

る二律背反である。「社会体」としての資本主義社会は，疎外を生み出すだけでなく，疎外の意識をも，いいかえれば，「ラディカルな欲望」をも生み出す。この「ラディカルな欲望」はたんなる貧困の意識やもっとましな生活を欲求する意識ではない。社会的諸関係が疎外されているという意識からでてくる止揚の欲望であり，資本主義によって不可避的にもたらされるものである。

「この意識は，それが現にあるということですでに資本主義を超えており，それが広がることによって，資本主義がこれ以上生産の基礎であることを不可能にする。だから二律背反的性格の解消をめざした行動は，集団的当為のなかで，すなわち『常態をこえる自覚』のなかで構成される。」[14) すなわち資本主義のなかですでに「ラディカルな欲望」を心に抱いている諸個人こそが，集団として社会を変革すべきであるという意識の担い手であるということを意味している。しかもその諸個人は，欲望の充足度に不満をもっているのではなく，社会の「充足の体系」そのものにラディカルな不満をもっているのである。この点に関し，ヘラーは次の様に説明している。

分業にもとづく階級社会では「欲望の体系」もまた「分割」されている。被搾取階級は，せいぜい自分達に割り当てられた欲望の充足の改善しか欲しないのがつねである。だがこの同じ被搾取階級が，彼らを支配する階級の欲望の体系と彼ら自身のそれとのあいだの対立を意識するようになる。この場合，彼らは何よりも彼ら自身のそれとのあいだの対立を意識するようになる。この場合，彼らは何よりも彼ら自身の欲望を満たすための障害を除去しようとし，彼ら自身の欲望体系を普遍化するか，あるいは支配階級の欲望体系の一定の契機を自分たちのために実現可能なものとしようとする。これによってもたらされるのは社会秩序の転覆か，生産諸力の全面的荒廃である。「そのときどきの現在を超えようとする欲求はラディカルな欲求ではない。なぜかといえば，この欲求が欲求体系全体を超えるものでなく，たんに欲求体系の『分割』にすぎないか

14) Agnes Heller, *The Theory of Need in Marx*, 1976, p. 94, 良知力・小箕俊介訳「マルクスの欲求理論」(Theorie der Bedürfnisse bei Marx, VSA., Verlag, 1976) 1982年，120-1頁。

らである。」[15] 中途半端な改良の積み重ねではなくその根本的革命性が「ラディカルな欲望」の本質である。“そして次にこの欲望の資本主義における固有性を確認している。「ラディカルな欲望」は自分が疎外されている，しかも労働をとおして全面的に疎外されているという意識にほかならない。したがってそれは資本主義の生みだす欲望であり，資本主義以外のいかなる社会もそれを生みだすわけにはいかない。資本主義的諸関係そのもののなかでこそ，それを超克しようとする欲求が生まれる。

以上のようなヘラーの「ラディカルな欲望」論について次の様な指摘も当然生じうる。

「ここでヘラーが描こうとしている『ラディカルな欲求』は，『欲求の倫理学』だといえないこともない。……資本主義のなかですでに『集団的当為』の担い手となり，『連合した生産者』としての在り方を理論的に先どりするのである。」[16] すなわち資本主義における諸個人の欲望の二律背反が来たるべき『連合した生産者』の社会の先どりを可能とするというヘラーの考え方に対してユートピア思想だと評価するのである。「すべての個人が自分の個性をつらぬきながら同時に人間の類性（本質）を代表し，共同体と自覚的につながりながら個性的能力を開花させていく。いうまでもなくこれは，若きマルクスの発想であっただけでなく，啓蒙主義の，そしてまた西欧的市民社会思想の楽天的ユートピアである。」[17]

来たるべき社会への移行を論じる時に，その変革の意欲と理論を現存社会の体制に見い出す方法はまさにマルクスのものであってそれ自体が問題ではないことは明らかだ。ヘラーの「ラディカルな欲望」論の「観念性」や「ユートピア的性格」が問題となるのは，「欲望の体系」の変革の論理が個人の「認識」に求められるだけあって，「欲望の体系」転回の内容が資本主義的現実の諸過程の中で具体的に，法則的に語りきれていないこと，そして諸個人の「ラディカ

15） *Id.*, p. 97, 同上訳書128頁。
16） 良知力・小箕俊介「同上訳書あとがき」191頁。
17） 同上，189頁。

カルな欲望」の集団化についての論理が必ずしも明確でないことの二点であろう。そこでまず，後者の方の論点，「集団化」についてから先にみてみよう。

ある欲望の体系が所与の社会組織体に特有の体系であるなら，この所与の社会を転覆させる主体的諸力はどのように生じうるか。

「資本主義から共産主義への道は客観的自然法則であるとする考え方……によれば，未来社会への移行とその創出を保証するのは，ラディカルな欲求を通じて構成される集団的主体（労働者階級）の革命的な闘争，すなわち革命的実践だけである。」[18] そしてマルクスは変革すべきもの（当為）を客体化したとヘラーは続ける。「マルクスは当為を客体化したのであるが，……『自然法則』へ客体化したのではなく，集団的当為へ客体化したのである。集団的主体の闘争だけが新しい社会をもたらすのである。」[19] ここでいう集団的主体とは労働者階級であるのは言うまでもない。

ヘラーの資本主義における諸個人の「ラディカルな欲望」の「集団化」についての論理があまり具体的でないのは，次の事情によるのであろう。マルクスが集団の主体を労働者階級に見い出しているのは否定できない命題であるが，ヘラーはそれをマルクスの時代的制約であると解しており，彼女自身は現代においてかならずしもその主体を労働者階級だと無条件に認めていないからである[20]。「労働者階級は人類をも同時に解放することによってのみ自己を解放することができるということが，たとえ根拠のあることであっても……そのことから，労働者階級がじっさいにみずからを解放したいと思っており，彼らの欲求が事実ラディカルな欲求であるという結論はまだ生まれない。」[21]

それでは労働者階級が資本主義社会で，まずは諸個人として「ラディカルな

18) *Id.*, pp. 85-6, 同上107頁。
19) *Id.*, p. 86, 同上108頁。
20) *Id.*, p. 86, 同上123頁。「このラディカルな欲求がマルクスの時代にはまだ生まれていず（少なくとも大衆的には），マルクスがそれをいわば『構成』しなければならなかった。……今日のわれわれがまさに，同じような『ラディカルな欲求』が生まれるのを目撃しているということを考えるべきであろう。また，このラディカルな欲求の担い手が今日では労働者階級ではない（あるいは労働者階級だけでない）ということも，マルクスの偉大さを損なうものではない。」
21) *Id.*, p. 89, 同上113頁。

欲望が「集団性」を獲得する論理はどこに求めるのが正しいのか。それはヘラーの所説の問題点として指摘した，「欲望の体系」転回の内容——手がかりとなるものは何か，それがいかに全体性，革命性を獲得していくのかの論理，すなわち移行の具体的論理を明らかにすることによって果たされると考える。

III　移行の論理としての「ラディカルな欲望」

我々は移行の論理をまず，「欲望の体系」と「労働の体系」の相互発展の過程にみる。

ここでも我々はまずヘラーの見解に耳をかたむけてみよう。

人間の個性が，個人が犠牲にされる歴史的過程を通じてしかあがなうことができないという，つまり生産のための生産が，人間的富の発展にほかならないという資本主義を特徴づける富と貧困の特殊な二律背反を打破するのは「人間の類の能力の発展」であるとヘラーは見る。「すなわち，『移行』の必然性を『保証』するのは，なんらかの自然法則ではなく，ラディカルな欲求なのである。」[22] そしてヘラーは「ラディカルな欲望」と労働の関係に言及しているマルクスを見のがしてはいないのである。「ラディカルな欲求は何らかの形で労働から構成されているという思想が，マルクスの著作を赤い糸のように貫いている。」[23]

その解釈のために前節で述べた自由な時間への欲望が再度登場してくる。

資本主義はある点以上に労働時間を短縮できないので，この点に達すると自由時間への欲求は原則的に「ラディカルな欲望」となり，それを満たすことは資本主義を超えることによるしかないとする。のみならず，「ラディカルな欲望」の性格は，自由時間への欲望との関係で特に具体的な形で現われてくる，それは資本主義そのものによって，資本主義の二律背反的性格によって生みだされるのであり，まさに資本主義の機能作用（資本の歴史的使命）の一つに数え

22）*Id.*, p. 84. 同上105-6頁。
23）*Id.*, pp. 90-1, 同上115頁。

られる。それと同時に同じ欲望が労働者階級を資本主義の超克に駆りたてる[24]。

来たるべき社会においては物質に対する欲望は基本的には満たされているのだから，個人の欲望は，「諸個人の欲求は教育，文化，芸術といった精神的欲求の充足へと向かう。」[25] それは労働から離れた自由時間獲得欲望であり，その達成によって個人の全面的発達はなしとげられることになる。

移行の論理としての「ラディカルな欲望」のもっている内容の一つが自由な時間に対する欲望であることは我々も前節で見たところである。この点においてはヘラーのマルクス欲望論の理解は我々と異なるものではない。そして彼女の「ラディカルな欲望」論のユートピア的性格も労働時間と自由な時間の資本主義における対抗性の強まりに対する彼女の見解を考えれば，緩和されているようだ。

そこで次に問題となるのは個人の全面発達＝普遍性への欲望，とりわけ資本主義的労働の体系における労働者の能力や人格の発達欲望である。

資本主義社会において支配的な「機械体系」は，諸能力の普遍性の発展を不可欠にする。しかしこれは，この社会の内部では自然法則として貫徹する。だが資本主義的分業は普遍性の発展を妨げる。労働者階級は政治権力を奪取し，分業を廃棄することによって，普遍性が実現されるようにしなければならない[26]。この様に考えてヘラーは，マルクスの有名な次の文章を引用している。

「しかし，もし労働の転換がいまや圧倒的な自然法則としてしか，そしていたるところで障害に突きあたる自然法則の盲目的破壊作用をともなってしか，実現されないとしたら，大工業はみずからの破局そのものを通じて，労働の転換を，したがって労働の可能なかぎりの多面性を普遍的・社会的生産法則として承認することを，死活の問題にするだろう。」[27]

---

24) *Id.*, p. 91, 同上116頁。

25) 的場昭弘，初期マルクスにおける欲求概念，「三田学会雑誌」73巻5号（1980年10月），125頁。

26) A. Heller, *op. cit.*, p. 92, 前掲訳書117頁。

27) Karl Marx, *Das Kapital*, Dritter Band, *Dietz Verlag Berlin*, 1955-1957, S 513, 長谷部文雄訳「資本論」1954年，775頁。

しかしヘラーは近代的工業生産の矛盾から「ラディカルな欲望」論をひき出してくることには消極的であり，[4] もっと広い概念である疎外にこだわり続けている。この点が移行の論理としての「ラディカルな欲望」論理解で我々と異なる点である。その相異点は彼女の論理が，「ラディカルな欲望」の内容が経済的法則の中で豊富化される蓄積論のレベルにまでひろがっていない所に理由があり，疎外論，自由に処分できる時間論を中心として論じられているからだと思われる。そこで我々は，蓄積論のレベルで移行の論理としての「ラディカルな欲望」を考察する段階に来たことを知る。

IV　「ラディカルな欲望」と労働力の再生産

我々はこれまで「ラディカルな欲望」の内容として，疎外論，自由な時間論，普遍性への欲望（個性の全面的発達欲望）を論じてきたのだが，これを更に進めて，日々おこなわれる労働力の再生産という視点から考えてみよう。ここでとりあげられる欲望の問題は，マルクスの時代では顕著ではなかった，その意味では現代的様相をおびたもの（たとえば福祉問題等）もあるが，それは移行の論理としての「ラディカルな欲望」の内容を一層明確にするものと思える範囲内で考えてみたものである。

労働者の欲望が社会的生産力の発展にともなって発達するという一般的根拠を考えてきたが，それはあくまで社会的生産力の発展が，諸個人の個性の全面的発達のための欲望そのものの多様性とその対象の豊富さをもたらすということそのための条件である「自由な時間」を創造するということであった。だからそのことが，資本の剰余価値生産として追求された結果として一般的に生じるという限り，その成果は労働者にとってさしあたり「請求権」として存在するだけである。この場合，「ラディカルな欲望」はそのたんなる一契機を与えられただけで，未だ人間本質に対する根本的欲望にまで達していない。そして又，その段階に到達する現実性も与えられていないのである。その現実性を得るためには資本主義的蓄積過程における労働力の再生産過程に入って考察しな

ければならない。そこでこの過程が資本の蓄積運動の一矛盾として形成され展開していく様子をみることができる。それには二つのアプローチがある。一つは価値論的アプローチであり，主に労働力の価値と欲望の問題，賃金と欲望の問題として考察する方法である[28]，今一つは，労働力再生産過程における危機の意識から発し，労働力を担う個性の発達とその保障の問題，言わば労働力再生産の質を問う方法である。

後者の労働力に関する資本と労働の対抗的矛盾の一側面は労働過程における労働力の一面化，貧弱化，最終的には破壊に至る過程として，すなわち労働力の発達を阻害する傾向の強まりとそれに対する抵抗と普遍性への欲望の生成過程として既に述べたところである。マルクスの時代では，この側面における「ラディカルな欲望」の生成・成熟の契機は，工芸学校，農学校，職業学校の発達であったということである。マルクスは教育と人間発達の欲望の関係を強調している。「資本からやっと奪った最初の譲歩としての工場工法は初等教育を工場的労働と結びつけるにすぎないとすれば，労働者階級による不可避的な政権獲得は，理論的および実践的な技術教育のためにも労働学校におけるその占むべき席を獲得するであろうということは疑う余地がない。」[29]

今日の社会にあっては，公教育制度の発展，多様な専門学校の出現，社会人教育のあらゆる形態での発達と，マスコミュニケーションによる大量の知識と情報伝達の展開は，資本及び国家による諸個人の操作と管理の強化の手段となるとともに，諸個人の発達の条件でもあることは疑いがない。ともあれ労働過程における労働者の知識，技能に対する欲望の形成は，労働力再生産過程の社会化一生活過程の社会化，消費の集団化とあいまって，ますます一層，社会と諸個人との関係を複雑で密接な相互依存的性格を強め，又そのことで諸個人の欲望変革の根本的性格を深めていくのである。

その過程を概略的にみれば次のようにまとめることができよう。

---

28) 拙稿，労働力の価値と欲望問題，「経済論叢」第121巻第3号（1981年）参照。
29) K. Marx, *a. a. O.*, SS. 513-4, 前掲訳書775頁。

第一に，標準労働日の確定と短縮によって生活時間を確保し，多面的活動が可能となる。第二に，たえざる技術革新による労働技術の変化は，より一般的応用可能な基礎能力の習得を条件付け，労働者自身もその習得への欲望を高める。第三に，婦人の社会的生産への大量参加は，家族の生活様式を社会的規模で変化させ，婦人自身の欲望発展とともに家族の欲望水準を高めること。第四に，集積される資本にともなう労働者の都市への集中は，労働者の生活を一層社会化し，社会的共同消費手段や制度的保障としての福祉欲望を発展させる。ここでは諸個人の欲望は共同的，社会的性質の下でしか存在しえないし，諸個人の共同性，社会性への依存が強く現われている。最後に，労働力移動につれ諸個人の全国的交流の規模と速度は高まり，大量生産・大量消費に促進され，全体としての欲望の多様化と水準を高めることになる。

とはいえ，資本主義にあっては欲望の対象を生産・販売・「管理」するのは資本や国家であり，その目的は営利と住民管理であるから，その個々の内容は歪曲せざるを得ない側面がある。その意味では諸個人は資本と国家によってつくりだされ，「管理」された「欲望の洪水」にともすれば溺れてしまう危険性を持っている。そのため資本による消費の強制と国家による「欲望管理」によって，諸個人の欲望はふくれあがり，とめどのない悪無限の欲望の虜になりやすい。生産＝労働過程で喪失した人間的なものを取り戻し回復・更生したいと欲求する（ラディカルな欲望）のではなく，逆に回復と充足の方向からはずれた方に一面的に充満していく欲望を抱くことでその埋合せを欲し，そして最後にはそうした諸々の個別的欲望さえも貨幣欲望に一元化させてしまって，欲望の人間本質との関係，ラディカルさを一切合切失ってしまうということが生じがちである。それは諸個人が個々に孤立して欲望充足をはたそうとし，充足の集団的性格に気付かない限り，その実現をはからない限りは，そうした資本と国家によってもたらされる「欲望の洪水」の中を泳ぎきり，個々の欲望を選択し，充足させていくことを通しての「欲望の体系」の変革は達成できないことを意味する。そこでは諸個人の欲望は「ラディカルな欲望」の内実をもたない

空疎なものとなってしまう。諸個人の欲望の相互依存的関係の発展は，ある局面では階級としての「ラディカルな欲望」として，他の面では家族や地域やその他の共同体としての「ラディカルな欲望」として意識され形成されていく。そして最後に「ラディカルな欲望」の集団的根拠を確かめておく必要があるだろう。

第一に，生産過程における労働者の結合，相互の連帯と団結を強め，階級としての自覚をもった労働者は，その発達の物質的条件をつくりだすとともに，社会の構成員として一定水準の欲望充足を要求する。第二に，労働者の都市集中は，労働力再生産過程の共同化，社会化を推進する。その家族生活は地域における社会的共同諸組織，機関，設備等への依存の新しい形態をつくり出す。ところが資本と国家はそうした費用はできるだけ節約しようとするので，労働者はもはや，個別的利害で資本，国家と対立するだけでなく，生活の諸部面で共同してその対立を深める。第三に，急激な資本蓄積の進行は自然環境，生活環境を破壊する。その防止と問題の解決の意欲は都市住民全体の欲望となり，自己の生命を守るという基本的欲望＝「ラディカルな欲望」として意識され強まっていくのである。

これらの労働者，諸個人の欲望の高まりに対し，資本は一つに，あらゆる部門での生産性向上によって欲望充足のコストを低下させるという形で対応し，一つにはそうした領域を新たに営利の対象として自からに取込もうとする。そして社会化，共同化された欲望に対しても国家はその費用を節約し，欲望充足は低位に抑圧される。この段階では欲望の充足の問題は対抗する一方の側の個人的欲望の寄せ集めではなく，社会の欲望として，もはや資本と国家が「欲望の体系」の基礎として否定されなければならない存在となっている，すなわち「ラディカルな欲望」の最も熟したレベルでの認識となっている。

我々はあまり結論を急ぎ過ぎたかもしれない。マルクスの時代を百年も飛びこえて諸個人や集団の欲望を語ることは，マルクスの欲望論解釈からはみ出し

てしまっているかもしれない。検討の材料としたヘラーのマルクス解釈とも少しずれが生じているかもしれない。しかしながら，ヘラー自身も認めているように[30]，マルクスの時代ではかならずしも大衆的に存在しなかった「ラディカルな欲望」を「構成」しようとしたマルクスの意図を現代においてより鮮明にするためには，まさに「ラディカルな欲望」の現代的性格を語ることが必須の事と考えたのである。そうすることによって，ヘラーの「欲望論」の問題点も少しは明確になったのではないだろうか。

そして最後に，この「ラディカルな欲望」概念は，これまで議論されてきた，貧困化論，変革主体形成論，人格形成論，労働の社会化論等に共通する基本的概念であり，それぞれの問題意識を一層明確にしうる概念であるということを指摘するにとどめておわりとしたい。

30) A. Heller, *op. cit.*, p. 86, 注20) 参照。